

# 古代から近代まで続いた「筏流し」

## 「朽木の杣」から川下り

朽木西部に広がる山地は、奈良時代から「朽木の杣」として、都の造営や寺院の建立のための用材を伐り出す場所として知られていました。ここで伐り出された木は、筏に組まれ、安曇川・琵琶湖を下って、都へ運ばれていきました。この筏流しは、その先、約650年もの間続けられる安曇川での主要な生業の一つになりました。

## 筏流しの作業工程

現在、聞き取りや古い写真等で概要が分かっている近代の筏流しの作業は、まず、梅雨明けから彼岸ごろの暑い時期に材木を切る「土用切り」から始まりました。切った材木はそのままの場所乾燥させ、秋に14尺(4・25m)の長さにするえられます。冬になると材木にくさびを打ち込み、ロープまたは藤のつるを付け、積雪を

利用して川岸まで運びます。その材木の両端に穴をあけ、その穴にネソと呼ばれる縄状の木を通して、つないで筏に組み、通常は3人の筏師が春の雪どけ水を利用して、その筏を安曇川河口の船木まで流しました。

また、水量の少ない支流などでは、「鉄砲」と呼ばれる「川の止め」を作って、一定水位まで川の水を溜め、一気に水門を開けて、その水の勢い(鉄砲水)で筏を流すことも行われました。さらに、岩場や急流の多いところでは、筏を流す時期の前になると石を割ったり、「川の止め」をつくって水面を高くしたりするなどの作業が行なわれました。この作業は「川せぎ」と呼ばれました。

## 筏流しと水力発電

大正10年(1921年)に荒川に、同12年には栃生に安曇川の水

を利用した水力発電所が設置され、電力会社は流筏路を作るなどして、筏流しが引き続き行えるように工夫をしました。荒川発電所では、筏が用水を取り入れる高岩堰堤から約1・1kmの水路のトンネルを通った後、安曇川へ合流するため、「ソロバン落とし」という装置のついた落差30mのス



荒川発電所後の「ソロバン落とし」

ロープが造られました。筏はここを通ることにより、難所の一つであった朽木溪谷を通らなくても良いことになり、材木運搬の大幅な時間短縮にもなりました。

筏流しは、戦後数年間続けられ、道路網の整備に伴いトラックでの材木運搬が行なわれるようになると、材木を1本ずつ流す単木流しという方法がとられるようになりました。しかしこの単木流しも、昭和30年ごろには行なわれなくなり、川を利用して材木を運ぶという長年続いた筏流しの歴史は幕を閉じました。

図文化財課

図(32) 4467

4月から広報誌作成に携わることになりました。

私事ではありますが、つい3月末まで中学校PTAの広報委員をさせていただいて、年4回のPTA広報誌を無事に発行し終えた安堵と達成感で胸がいっぱいになっているところでした。そのような中、市の広報誌作成に関われるという突然の出来事に衝撃を受けたことを今でも覚えています。熱意を持って作成に取り組み、市民の皆さまに楽しんでいただけるよう頑張りますので、これからもよろしくをお願いします！(Y)



## 朽木谷を經由した若狭街道

## 針畑越と朽木街道

## 御食国若狭と鯖街道

京都と若狭を結ぶ主要ルートである「若狭街道」は、その近さから「京は遠ても十八里（72km）」といわれ、古くから若狭地域の海産物をはじめ、日本海経由の文物を運ぶ街道として利用されてきました。若狭の魚が新鮮なうちに京都に届くようにと、行商人が夜通し歩き、翌日には京に届けられ、そのころには、ちょうど良い味になったと伝えられています。この

ことから、若狭街道は「鯖の道」と称されるときにも、最近では「鯖街道」とも呼ばれ、隣接する若狭小浜地域では、日本遺産「御食国若狭と鯖街道」としての活用に取り組まれています。

## 最古のルート針畑越

古くから荷運び人たちが盛んに行き交った若狭街道ですが、そのルートはいくつか存在することが判っています。室町時代の資料には、2つのルートの記録が残っており、このうちの1つが朽木の西部を經由する「針畑越」です。



針畑越は、京都の鞍馬口を起点に鞍馬寺に至る道（鞍

馬街道）を、更に北上し若狭まで延長したルートです。ルートの途中で、針畑地域を通り根来坂峠を越えて若狭に至ることから「針畑越」と呼ばれています。この針畑越は、複数存在する若狭街道の中でも、最短にして最古のルートとして利用されてきました。昭和52年に刊行された『朽木の昔話と伝説』では、「一番古い鯖の道」として取り上げられ、高低差が大きく傾斜が急で険しいながらも最短距離のルートとして、約1200年前から利用されていたことが記載されています。

## 朽木街道と木地山越

もう1つのルートは、京都の河原町今出川付近を起点に、大原↓葛川↓朽木↓保坂↓熊川を通るルートです。後に「朽木街道」とも呼ばれ、最も利用度が高く、現在もこのルートは、国道367号線としてほぼ受け継がれています。この2ルート以外にも、朽木の三ツ石で分岐し、麻生川を遡り若

狭に至る「木地山越」と呼ばれるルートが存在するなど、若狭街道は、単なる若狭と都をつなぐ街道としての役割だけではなく、朽木谷の人々による長年の営みや交流などによって、幾筋も育まれてきました。

何本もあった若狭街道も時代の移り変わりとともに、道のりが遠くても高低差が小さい「朽木街道」が重要視され今に至ります。その一方、針畑越は、古くからの景観や趣のある古道の情景を残すことから、最近では山登りやトレッキングで、再び多くの人々を魅了し、引き付けるルートとなっています。

## 文化財課

図(32) 4467

## 編集後記

今年の3月から、高島市公式のフェイスブックとインスタグラムが始まっているのをご存知ですか？今までの広報媒体（広報誌・防災行政無線など）とは違った視点で、高島の魅力を広く発信しています。最近、発信する魅力を求めて取材を行っているのですが、普段見る市内の景色が今まで以上に魅力的に見えるようになってきました。市内には自分の知らない魅力的な場所・出来事がまだまだたくさんありますね。ぜひ、みなさんも人に紹介する視点で周囲を見回してみてください。(H)

広報たかしま

平成29年

6

月号

No.209

発行 高島市

編集 政策企画部広報課

0740 (25) 800049

http://www.city.takashima.lg.jp

info@city.takashima.lg.jp



# 今津町弘川の遺跡群と地鎮祭

## 平安時代の弘川周辺

平成29年4月の弘川宮ノ下遺跡の発掘調査では、平安時代中期から後期（10～13世紀頃）と考えられる2棟の掘立柱建物跡が見つかりました。

この時期の建物は、隣接する弘川佃遺跡でも過去の調査で見えられており、この一帯に多くの建物が存在していたことがわかっています。平成15年度の調査では、これらの建物を建てる前に使用されていた地鎮の痕跡として、皇朝十二銭最後の铸造貨幣である乾元大寶を多量に埋納した土師器小甕が2つ検出されました。



乾元大寶埋納小甕

た。

1つは、□径9cm、高さ14・5cm、底部径9・5cmで、埋納されていた穴から90数枚の貨幣と13枚のさし銭、7個のガラス小玉が出土しました。

もう1つの小甕は、□縁部を欠損していますが前者よりやや大きめで、埋納されていた穴から8枚の貨幣と10枚のさし銭が見つかりました。

## 地鎮祭の様子

これらの小甕が見つかった周辺からは、この貨幣が铸造された時期の遺構等が見つかっていないことから、地鎮のために小甕が、単独で埋納されたと考えられます。

古代の人々は、土地を掘り起こしたり建物を建てる行為は、土地の神様を怒らせることになると考えており、その前に地鎮祭を行い、土地を利用してもらうことの許しを請うとともに、工事の安全などを祈願していました。

地鎮祭では、お金やガラス玉、金箔、水晶などの貴重品を土器

に入れ、穴を掘って埋めました。こうした地鎮祭の始まりは、約1300年前、持統天皇の時代、藤原京造営の際に行われた儀式であると考えられています。

平安時代中期の今津町弘川南東部では、大型の掘立柱建物が多数発見されていて、郷などの管理にかかる中心施設として機能していたと考えられています。

このように、10世紀頃、当地周辺に公の施設の建築など大規模な開発が行われたと考えられることから、その地にいる土人（土地神）を鎮めるため、多量の乾元大寶が埋納されたのではないかと考えられています。

## 現代に続く地鎮祭

現在も土木工事や建築工事などを行う前に、地鎮祭が行われていますが、工事の安全や家の繁栄を願う思いは、古代から受け継がれていると考えられます。

この乾元大寶が埋納されている小甕は、今津東コミュニティセンターに展示しています。



※皇朝十二銭：和銅元年（708年）から応和3年（963年）にかけて日本で铸造された12種類の銅銭の総称  
※さし銭：紐を通してまとめた銭

図文化財課

☎ (32) 4467

## 編集感

山々の緑が深くなり、青空とのコントラストが一層強くなる7月。本格的な夏が始まる前に、少しでも過ごしやすい準備をしたいところです。今年の母の日、父の日には、猛暑を見越して高島ちぢみのパジャマをプレゼントしてみました。サイズ選びから苦戦しましたが、何とか喜んでもらえたようです。これからの季節は、熱中症などが特に心配される時期です。夏を満喫するためにも、体調管理には十分気を付けてお過ごしください。(M)



広報たかしま

平成29年

7

月号  
No.210

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒900-0103 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎ 0740 (25) 8000(代)

http://www.city.takashima.lg.jp  
mailto:info@city.takashima.lg.jp



峠を越えた筏と魚の話  
いかだ

## 峠を越すための工夫

朽木西小学区の針畑地区は、15世紀以前は針畑荘と呼ばれ、京都の法成寺や比叡山延暦寺領として、材木を供出する杉が営まれていました。針畑地区最奥部の生杉集落の西方には、近江と山城の国境である地蔵峠（680m）があり、峠を下ったところの枕谷は、京都府北部を流れる由良川源流の

一つとなっています。この辺は、江戸時代までは「中山のちまた山」と呼ばれて、針畑郷と知井郷（南丹市美山町）が共用する山林でした。

この中山で伐採されたスギなどの用木は、峠を越えて針畑川の支流生杉川の源流付近に運ばれて、筏に組まれて、生杉川を下りました。峠を越すにあたっては、驚くべき方法が用いられていました。枕谷と地蔵峠の落差（比高差）が25mほどであることから、通常は木の幹を輪切りにした小径の車輪をつけた「コロ車」と呼ばれる運搬車や人の肩が使われましたが、ときには小さな運河を掘って材木を流したり谷を堰き止めて材木を浮上させることで落差を少なくしたといわれています。過酷な労働に対して知恵を働かせて立ち向かった先人の努力がうかがわれます。

## 丹波の筏も峠を越えた

丹波山地には、中央分水嶺が存在し由良川が東から西へ流れて日



現在の地蔵峠のようす

本海へ注ぎ込み、保津川・桂川の上流となる大堰川が北から南へ流れて淀川と合流し、大阪湾に注ぎます。

材木の需要が多かった京都へは、北山で伐採された材木が筏に組まれて大堰川を下り、嵐山へ運ばれました。一方、由良川水系では都の需要に応えるために、上流から流してきた筏を美山や山国付近で解体し、海老坂・深見峠・越木峠を人の背や牛馬の背で越して、大堰川支流の弓削川岸や田原川岸へ運んだのち、再び筏に組ま

れ都へ運ばれました。針畑と同様の手法が、丹波においても行われていたのです。

## 峠を越えたイワナ

京都や福井の日本海側には、溪流魚のイワナは棲息してはいないといわれています。しかし、由良川の最上流域では、時々その姿を見ることがあります。昔針畑の人が移植したためだそうです。

峠を介して、地域間の交流があった証拠といえるでしょう。

## 文化財課

図(32) 4467

夏真っ盛りの8月！皆さん夏を満喫していますか？わたしは寒いのが苦手なので、夏は得意です！

さて、最近仕事で写真を撮ることが多くなり、写真について少し考えてみました。写真で高島の魅力を伝えることのひとつは「見たことがないものを見せる」ことだと思います。それは「見たことがない風景」かもしれないし「普段から見ているものを、全くちがう角度から見てもらう」ことかもしれません。身近なところにも、いろんな「発見」があって、それを自分なりの「レシピ」で見てもらう。それが写真を撮ることのおもしろいところかなと思っています。(Y)



広報たかしま

平成29年

8

月号

No.211

発行 高島市

編集 政策企画広報課  
〒590-1001 滋賀県高島市新旭町北畑590番地

☎ 0740 (25) 8000(内)

http://www.city.takashima.lg.jp  
mailto:info@city.takashima.lg.jp



# 大般若経が運ばれた

## 古道・近江坂

### 県境を越える古道・近江坂

今津町酒波と福井県若狭町能登野を結ぶ古道・近江坂は、県境を越える長大な峠道で、一部は美しいブナ林が続く中央分水嶺高島トレイルのコースに重なります。また途中の標高950・1mの大御影山への登山ルートでもあり、家族旅行村ビラデスト今津近くの平池脇が登山口となっています。



近江坂

一方で、この近江坂は、今から700年近く前に、若狭国倉見荘から近江国河上荘へ600巻におよぶ大般若波羅蜜多經(大般若経)という経典を運んだ道として、地元では古くから知られた道でもありました。

### 唐から伝来「大般若経」

近江坂の近江側の起点に位置するのは、奈良時代に行基によって開創されたと伝わる酒波寺で、寺に隣接する日置神社に残る古文書によると、観応2年(1351年)11月、若狭国倉見荘の人々が、酒波寺のある河上荘の後山(入会地)への立ち入りを認められたお礼として、大般若経600巻を「酒波岩剣大菩薩」(日置神社)に贈ったことが記されています。このとき、経典が運ばれてきた道が近江坂で、おそらくは100巻ずつ6つの経箱に収められた大般若経が、倉見荘の人々の手で、大切に峠を越えて運ばれてきたものと思われる。

また、大般若経の元の所在地である若狭国倉見荘の地にも、この件についての記録が残されていて、そこには若州能登野・倉見両村から大般若経を河上荘に寄進したことが記されています。

大般若経とは、唐の玄奘が漢訳した字数が500万字にのぼるといわれる膨大な量の経典で、日本への伝来時期は正確には分かっていませんが、奈良時代以降、各地の寺院で盛んに大般若経の読誦や書写が行なわれたといわれています。大般若経は、600巻という膨大な巻数の経典であったため、全巻を一度に揃えることが難しく、寄進の際には、古いものの一部を補完したり、書写しなおしたりして使われることが一般的でした。この倉見荘から寄進された大般若経についても、先の古文書には「古筆なり」という説明が書かれており、寄進時よりもさらに前の時代に書かれた貴重な経典であったことが想像されます。

### 物流の道・交流の道

近江坂を通って運ばれたものは経典だけではありませんでした。倉見荘に残る記録には、河上荘の後山である若狭国境の三十三間山が、古くから能登郷の社(若狭町成願寺に所在する閭見神社)への下山とされていたため、毎年4月の川上祭の10日前に、山手米一石二斗三升九合が倉見荘から近江坂を通って、河上荘へ運ばれていたことが記されています。近江坂を通じた河上荘と倉見荘の古くからの交流がうかがわれます。

関文化財課 ☎(32) 4467

### 編集 雑感

現在、インスタグラムで高島から見える魅力的な朝日を紹介するキャンペーン、「#タカシマノアサヒ」(詳しくは市のホームページ)を開催しています。先日、朝日の撮影に行きましたが、新旭地域は曇りでした。残念に思って帰ってくると、高島地域からは綺麗な朝日が見えたとの連絡がありました。高島市は広く、同じ日でも場所によって見え方が違うんですね。1月末のキャンペーン終了まで、早起きして朝日の撮影を頑張ります！(H)



広報たかしま

平成29年

12

月号  
No.215

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒910-0102 滋賀県高島市新旭町北畑66番地

☎0740(25) 8000(代)

http://www.city.takashima.lg.jp  
mailto:info@city.takashima.lg.jp



# 中世末期の貴重な武家庭園

## 国名勝 旧秀隣寺庭園

岩神館の足利庭園

旧秀隣寺庭園は、朽木岩瀬の興聖寺内にあります。安曇川によって形成された河岸段丘の縁にあり、眼下に流れる安曇川と対岸の集落を見下ろし、その背後の蛇谷ヶ峰を遠くに望むことができます。景色の良い場所にあります。

享祿元年（1528年）に、室町幕府第12代將軍足利義晴は、京都の兵乱を避け、この地の領主である朽木植綱を頼って朽木に身を寄せたといわれています。この時將軍のために、植綱が岩神館を造り、旧秀隣寺庭園を築いたとされています。この庭園は別名、足利庭園とも呼ばれており、室町幕府の管領であった細川高国が、作庭したと伝えられています。

### 秀隣寺庭園の特徴

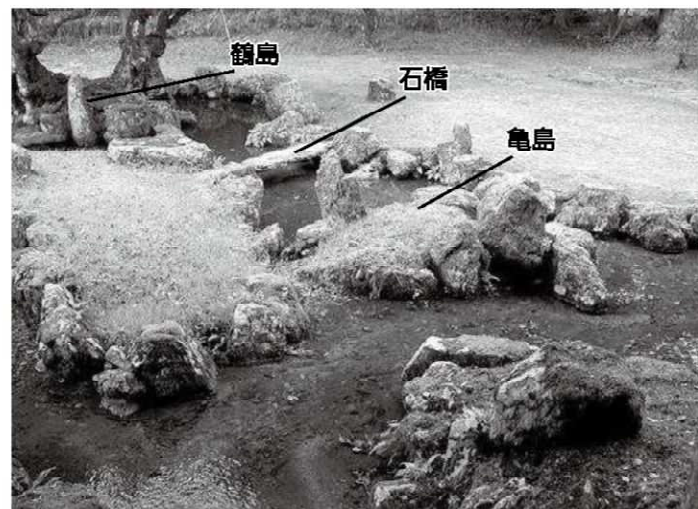
慶長16年（1611年）、岩神館と庭園があった地に、朽木宣綱が、正室の菩提を弔うため、秀隣寺を建立しました。秀隣寺は、その後何度も火災等に遭い、今は朽木野尻にあります。江戸時代に秀隣寺の庭園であったことから、現在、旧秀隣寺庭園と呼ばれています。

この庭園は、興聖寺本堂南方の一段低い箇所位置し、水は小彦

谷から取り入れています。築山に組まれた滝石組は、「鼓の滝」と呼ばれており、そこから流れでた水はその下にある水分けを流れ落ち、池泉に注ぎます。曲水で造りあげられた池泉の最もくびれた中央付近には、見事な自然石による「石橋」が架かっており、その左右に「亀島」「鶴島」とされる2つの中島が存在します。北側の島は、亀島とされ、力強く首を持ち上げた頭石と尾石が確認できます。南側の島は、鶴島とされ、やや抽象的な造形で蓬萊山と鶴亀を兼ねた珍しい石組であるといわれています。

### 全国屈指の武家庭園

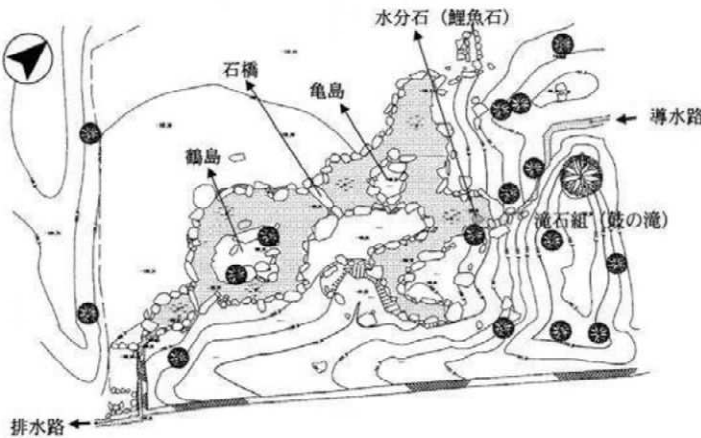
旧秀隣寺庭園は、大きな流れと曲線に富む護岸や地割などの景観、豪快で力強く洗練された石組を配する意匠等が特徴であり、室町時代の特色が表れている全国屈指の武家の庭園として貴重である



ことから、昭和10年（1935年）に国の名勝に指定され、今でも大切に守られています。

図文化財課 図(32) 4467

旧秀隣寺庭園平面図



広報たかしま

平成30年

1

月号

No.216

発行 高島市

編集 政策部企画広報課

〒0740 (25) 800044

http://www.city.takashima.lg.jp

info@city.takashima.lg.jp

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。さて、新しい年がやってきたからには新しいことを始めてみたい、と思っている方はいらっしゃるいませんか。私もその一人です。そこで挑戦してみたいのが、今月号で特集している「BIWA-TEKU」。該当地域をウォーキングしたり特定のけん診を受けたりすると「健康ポイント」が貯められ、一年分で賞品抽選に応募できるようです。スマホを持っていない方も、アプリを始めた方と一緒にウォーキングやけん診を受けて、今年一年楽しく健康を続けませんか。(M)



# 高島トレイルの終点「丹波越」

## 高島を縦断「高島トレイル」

高島市には、高島トレイルと呼ばれる市内を縦断する登山ルートがあります。この道は、マキノ愛発越から今津の山を経て、朽木三国岳へと及び約80kmの道で、日本列島の日本海側と太平洋側を区切る中央分水嶺の中央部に位置しています。このトレイルでは琵琶湖と若狭湾の両方を望む事がで

き、地元の人々によって守られてきた古道や、かつて使われていた山道を活かして、今も多くの人々が訪れています。

## トレイル終点の「丹波越」

高島トレイルの終点、朽木桑原の近くにある「丹波越」も、そうした古くからある峠の一つです。滋賀県最西端を流れる針畑川に沿って点在する集落の一つである桑原と、京都市最東

ことになった徳川家康が通った退却ルートが、この道であったともいわれています。また、久多は木地師など、山の仕事を行う人々の集落であったとされていますが、木地師は良質の木材を求め、山間の集落を渡り歩いたと言われており、この丹波越を利用していただののではないかと考えられています。

## 鯖街道の「丹波越」

現在、丹波越の近江側の道は歩きやすい道に整備され、「鯖街道」という表示もあるように、この道が若狭で水揚げされた海産物を京へ運ぶ「鯖街道」のルートの一つであったということがわかります。鯖街道としては、同じ朽木の「針畑峠」が有名ですが、実際には鯖を運んだルートは数多く存在すると言われており、丹波越もその一つです。

一方、京都側の道は廃道となり、久多まで抜ける事はできませんが、周辺の経ヶ岳・三国岳等へ



傾斜の多い道ですが、京との行き来には無駄のない直線的なルートで、戦国時代には急場での退却路として利用された事もあったと言われています。織田信長が越前朝倉氏を攻めた際に、浅井長政の裏切りで敗走する



鯖街道 峠茶屋跡

つながるコースの一つとして、近年も登山を楽しむ人が訪れています。

図観光振興課 図(25) 8040

編集 雑感 「#タカシマノアサヒ」キャンペーンに参加していただいた皆さん、本当にありがとうございました。感謝を表現しようと、参加作品を並べて表紙の写真を撮影しました。並べて見ると、改めて高島市の朝日の素晴らしさが確認できますね。私は、このキャンペーンでたくさんの皆さんと一緒に魅力を発信できたことが一番嬉しかったです。これから色々取り組んでいきますので、一緒に「高島市の魅力」を見つけて発信して行きましょう！(H)



広報たかしま

平成30年

3月号

No.218

発行 高島市 編集 政策部企画広報課  
〒510-0106 滋賀県高島市新旭町北畑560番地

☎ 0740 (25) 8000(代)  
http://www.city.takashima.lg.jp  
mailto:info@city.takashima.lg.jp



# 蓮如上人御影道中

## 蓮如の御影が吉崎別院へ

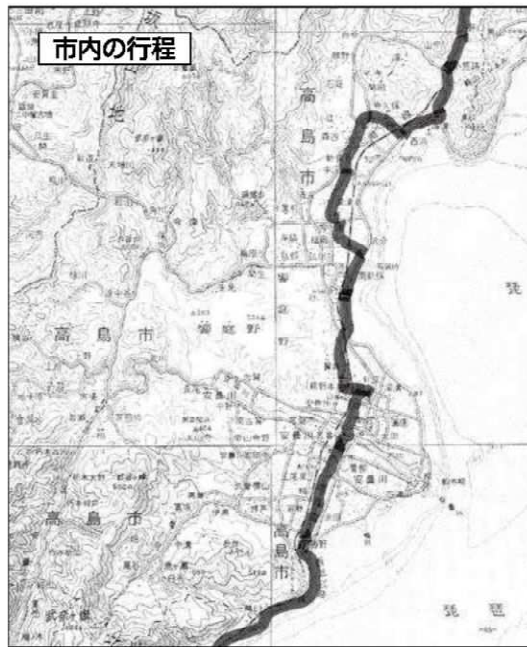
毎年4月18日の午後、リヤカーに積まれたきらびやかな輿を中心とした南から北へ向かう30人余りの一行が、鵜川の白鬚神社前に差し掛かります。この一行は、蓮如の御影(肖像)と共に、京都の東本願寺から福井県の吉崎別院へ向かう人々で、湖西路の春の風物詩ともなっています。

「蓮如上人御影道中」と呼ばれ

るこの行事は、本願寺第8世蓮如の没後、蓮如の北陸での布教の苦勞を偲んで吉崎御坊(別院)で行なわれた年忌法要のために、蓮如の御影が京都から吉崎へ運ばれたことに始まると伝えられています。以来、年忌法要に合わせて、供奉人と呼ばれる人々が、約240kmの道程を御影と共に歩む仏事として、300年以上の間続けられていると言われています。

## 道中の行程

一行は、毎年4月17日に東本願寺を出発し、琵琶湖西岸の道を北上し、途中、沿道の真宗寺院に立ち寄り、蓮如の教えを伝えながら、18日の午後、高島市内に入ります。その日は勝野の寺院で一泊し、19日は新旭町、今津町の寺院に



## 蓮如の腰掛石

市内には、蓮如にまつわる伝承地が多くあり、その一つである打下集落の南端、三尾崎の中腹には「蓮如の腰掛石」と呼ばれる石が残されています。これは、蓮如の北陸への旅の途中、籠を担いでいた一人が腰痛を起こし、しばらく

立ち寄りながら北へ向かい、夕方にはマキノ町に至ります。マキノ町では蛭口の寺院で一泊し、23日の昼には福井県敦賀市に入り、23日には、あわら市の吉崎別院に到着します。

蓮如は、室町時代中期の浄土真宗の僧で、民衆の側にたった分かりやすい教化活動を行い、多くの人の崇敬を集めました。しかし、本願寺の勢力が拡大することを恐れた比叡山延暦寺から攻撃を受け、文明3年(1471年)5月、蓮如は京を離れることを決意し、近江(滋賀県)を通過して越前(福井県)に向かうことになりました。



休憩をとるようになった時、蓮如が腰かけた石だとされ、蓮如はここから眼前に広がる琵琶湖を眺めて旅の疲れを癒したと伝えられています。

図文化財課 ⑧(32) 4467

**編集 雑感** 日中、窓から見える景色がだんだんと色づき、ぽかぽかとした陽気が伝わってくる季節となりました。

暖かいから大丈夫!と思い薄着で外出してしまうと、夕方や夜にかけて急に気温が低くなることもしばしば。卒業や進級、入学など色んなことが変化し、「次へ」と進むこの時期だからこそ、体調にはよくよく気を付けたいものです。体力を少しでもつけるために、春を見つけに家の周辺を散策するのもよい運動になるかもしれませんね。(M)



広報たかしま

平成30年

4

月号  
No.219

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課  
〒910-1-0001 滋賀県高島市新旭町北畑6-6の番地

☎0740(25)8000(代)  
http://www.city.takashima.lg.jp  
E:info@city.takashima.lg.jp



## 金毘羅参りの楽しみ

## 講による旅の流行

江戸時代中期以降は、社会世情が安定したことや庶民の生活にゆとりが生じたこと、そして参勤交代制度によって全国で街道や宿場の整備が進んだことなどから、旅をする人々が飛躍的に増加しました。しかし、領主支配体制の中の「土地を守る農民」と「家を守る女性」という認識は根強く、基本的に農民と女性が理由なく旅することは禁じられていました。

このため、人々は湯治や社寺参詣などを目的として、旅に出る機会を積極的に作るようになりました。特に、伊勢参りや善光寺参りといった社寺参詣のためには、講と呼ばれるグループを作り、旅の経費を掛け金としながら、メンバーが順番に旅に出ることができ、システムが形成されました。

## マキノから金比羅宮へ

「マキノ町誌」に載る「人馬賃銭覚」

「銭覚」は、江戸時代後期の約20年の間に、年に一回、マキノ町内に住む2〜7人が、香川県琴平町の金毘羅宮へ参詣した際の道中の経費を記したものです。ここでは、この記録から、金毘羅宮までの日程、コースを探ってみましょう。

マキノ町を出発した一行は、まず正月6日頃に京都伏見の「はりま屋善兵衛」に宿泊します。伏見からは船に乗って、淀川を下り、大坂淀屋橋に向かい、ここでは「金毘羅出船所・松屋卯兵衛」に宿泊します。この宿を出発するのが正



「人馬賃銭覚」

月12日頃で、伏見出発から大坂淀屋橋出発までは6日間を要していることになりました。この間には、京見物や大坂見物をして、いたことがうかがわれます。

淀屋橋から船に乗って向かう先は、讃州丸亀（香川県丸亀市）で、一行は京橋東詰柏屋団次の宿に泊まっています。この宿は「出船所」と記されていて、大坂からの船着き場であると同時に帰路の出航場所であったことが分かります。ここを出発するのは正月16日頃で、この間でも神戸や高松見物をして、いたと考えられます。

ここからは、陸路で琴平（香川県琴平町）に向かい、次の宿泊先は「金毘羅大門前・高松源兵衛」となっています。そして正月21日頃には、この宿を後にして、帰路についたことが分かっています。

## 観光を楽しむ人々

記録からうかがえる日程は、年によって若干の違いはあります



金毘羅講中によって建てられた常夜灯(今津町深清水)

が、全体的に随分とゆったりとした行程になっており、行く先々の観光や宿泊は、金毘羅参りをする人々の大きな楽しみになっていたようです。

図文化財課 田 (3) 2 4 4 6 7

編集  
雑感

最近、自己所有のカメラを新調しました。昨年末頃から、近年のミラーレス一眼カメラの性能や技術の進歩に勢いと魅力を感じていました。そんな時、周りにカメラを始めたり、買い替えたりする者たちが現れ、突然ミラーレス化の波がやってきたのです。

そして「迷っている間にも高島の四季は移り変わり、撮影チャンスを逃す！」と自分に言い聞かせ新調を決意しました。

今後は、個人的にも高島の多彩な魅力を写真の力で伝えられるよう、愛機と共に腕を磨いていきたいと思います！（Y）

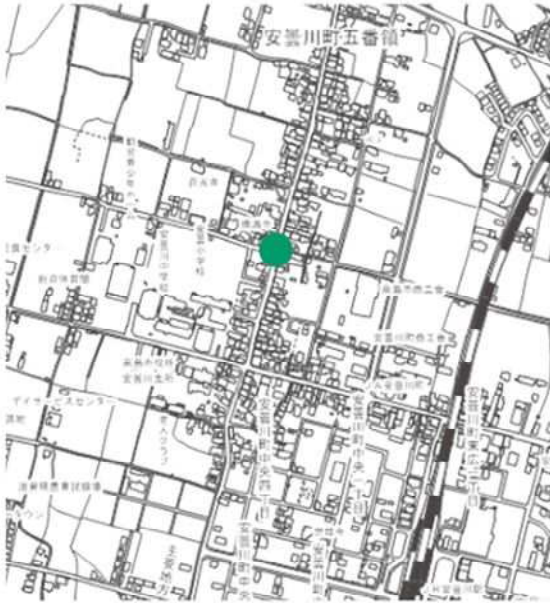


# 中世に活躍した「南市商人」

## 南市を拠点とする南市商人

中世の高島地域では、安曇川町の南市を拠点としていた、「南市商人」とよばれる商人たちが活躍していました。この南市商人の存在は「今堀曰吉神社文書」の中の一部で確認できます。

南市商人は小浜との通商を盛んにおこなっており、海産物を主とした品物を受け取りに小浜まで足を運びました。その際には、今津と小浜を結ぶ「九里半街道」を通るルートを利用したとされています。南市商人はこの九里半街道



を利用した通商独占権を主張し、これを巡って現在の東近江市を拠点とする保内商人との相論(争い)にまで発展しました。この相論は、保内商人が荷物を小浜へ輸送しようとしたところ、南市商人がその荷物を押収したことに始まり、保内商人が訴訟を起こしたことで、両者の間には緊張関係が生み出されました。結果的には保内商人の九里半街道通過が認められています。

## 五箇商人と呼ばれて

南市商人は湖東との通商にも尽力し、湖東の小幡・薩摩・八坂・田中江の商人たちと並んで「五箇商人」と呼ばれるようになりました。その中で南市商人は小浜から運搬されてきた海産物を湖東方面に運搬したり、湖上交通を利用して京都に出て売るといった役割を

担っていました。なお、五箇商人は先述した保内商人と南市商人との九里半街道を巡る相論にも南市商人を含む商人団として参加したと伝えられており、強力な連携体制がとられていたことが伺えます。

南市での売買記録は、朽木家第十二代当主の朽木晴綱の時期に書かれた「御元服付料足下行帳」の中に残されています。そこには布、タコ、水鳥、鮎、山鳥、アワビなどが売買されていたことが記されており、各地から集められた特産物に加え、地元で採れた特産物も扱われていたことが分かります。

## 大溝城下へ移転

その後、織田信長の甥である織田信澄が居城を新旭町の新庄城から大溝城へ移すと、南市も大溝城下へと移されました。大溝城のすぐそばには、勝野津があり、明神崎と長宝寺山が切り迫った立地で、交通の要衝となっていました。



市場が存在したと考えられる場所

た。こういった環境もあり、南市商人たちは城下の発展に貢献することになりました。

図文化財課 ☎(32) 4467

## 編集感

みんなのページにたくさんのご応募をありがとうございます  
※寒さが増す時期ですが、皆さんの投稿に「ほっと」温かくさせていただいています。さて、冷えは身体の大敵です！年々、無理をすると身体に影響が出やすくなったと感じていましたが、最近はずっと不調がやすい…その原因が冷えからきていることに最近気づいた私ですが！心がけるようになったことは、基礎代謝をあげることです。ゆっくりお風呂に入った後のストレッチ等を毎日行っています。皆さんも温活に取り組み、平成最後の冬を乗り切りましょう！(A)

広報たかしま

平成31年

2

月号  
No.229

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課  
〒520-0156 滋賀県高島市新旭町北畑5-5番地

☎0740(25) 80004  
http://www.city.takashima.lg.jp  
mailto:info@city.takashima.lg.jp